

【書評】

Christopher J. Berry, *The Idea of Commercial Society in the Scottish Enlightenment*

Edinburgh: Edinburgh University Press, 2013, xii + 244 pp.

本書はグラスゴウ大学のクリストファ・ベリー名誉教授の近作である。教授はブリテンだけではなく、アメリカをはじめとして方々で講義をし、日本と中国でもしており、親日的な研究者で、多くの日本人研究者の受け入れでも貢献があることを特筆しておきたい。

教授は大部のスミス研究論文集も編集しているが (*The Oxford Handbook of Adam Smith*, ed. with Maria Pia Paganelli and Craig Smith, Oxford University Press, 2013), こうしたなかで、本書は教授のスコットランド啓蒙研究の集大成と見なしうるもので、以下の目次からもうかがわれるように、スコットランド啓蒙の「商業社会」概念の諸側面に光を当て、深く掘り下げた著作である。全体は7論文から成っている。

1. Scotland, Improvement and Enlightenment
2. Commerce, Stages and the Natural History of Society
3. Prosperity and Poverty
4. Markets, Law and Politics
5. Liberty and the Virtues of Commerce
6. The Dangers of Commerce
7. The Idea of a Commercial Society

改良・改善を焦点とするスコットランド啓蒙の思想の制度的背景を詳述しているのが1.である。歴大な研究史を参照して、政治的安定と経済状態、教区、大学、クラブと協会を鳥瞰し、啓蒙思想家としてのベーコン、ニュートン、ロック、モンテスキューのエッセンスを描いている。

2.は、ミークが詳細に調査した生活様式と

しての4段階論について、ミークが言うほどスコットランドの啓蒙思想家は4段階論に一般的に依拠したわけでもないし、生活様式というより所有・取得様式の区別として、また理念型的な自然史的枠組みとして援用されたのだとして、ミークを批判している。その起源をプーフェンドルフに求めたホント説もケイムズを創始者とするピーター・スタイン説も根拠薄弱だと一蹴される。著者は商業社会の成立問題のほうに重要だとして力点を移し、意図せざる結果としての商業社会の成立論について、ヒューム、スミス、ロバートソン、ミラーなどの共通の認識枠組を強調している。

3.は、商業社会の際だった特徴を豊かさにも求めるのはスミスだけではなく、スコットランド人の共通の理解であり、それは分業の成果であるということから、まず分業を論じ、社会的側面と技術的側面を指摘している。また商業の発生と普及の因果関係認識の多様性に注意を促し、著者が1997年の著書で提唱した、ヒュームやスミスの商業を道徳的原因に関連づける「ソフトな決定論」を再論している。この点はスコットランド啓蒙のすぐれた遺産であろう。後半は貧困論で、貧困に徳をみるストア的・キリスト教的伝統がヒューム、スミスたちによって転換され、下層階級にまで行き渡る豊かさこそ徳を可能にするという思想の誕生が描かれる。

4.は、商業の発展には期待の実現と見知らぬ他人との交換を可能にする法の支配あるいは正義の制度的確立が不可欠である点を強調

し、法の発展をヒューム、スミスがどう考えたかを貨幣論を交えて説いたのち、正義論、最後に商業政治を扱っている。ヒュームは正義を人為的徳としたが、他のスコットランド人は自然的徳とした点で論争があった。しかし、効用重視はスミスもミラーもほぼ踏襲した。商業社会での統治者の役割を国防、公共事業、司法に絞ったスミス説と他のスコットランド人の各論には微妙な差異があり、政治の役割の理解の差異をヒューム、ファーガスン、ケイムズ、ジェイムズ・アンダーソンなどに見ている。

5.では、商業社会は最大に恵み、富裕と自由をもたらすというスミスの議論のうち、自由を論じる。古代と近代の自由の差異に関して、著者は古代の自由概念には平静を重視する流れと共和主義的な自由とがあるとしたうえで、法の支配を重視するスコットランド啓蒙思想家の自由論を比較したのち、正義と慈恵、近代の道徳的経済、商業の徳をトピックとして取り上げ、関連の議論を分析し、スコットランド啓蒙の特徴を指摘する。

6.は、商業の危険性についての議論を取り上げる。個人的自由と公共的自由、奢侈論争、国防、分業、公信用といったトピックについて、スコットランド人が、いかに商業社会が直面するこうした危険性を認識したか、共和主義の継承を含めて、いかに対応策を講じていたかの精細な分析を繰り返している。

最終の7.では、スコットランド啓蒙思想家が、商業社会をこれまでの社会より優れた社会であることを明らかにしようと努めながら、その弱点も多面的に明らかにすることによって、「商業社会の概念」を掘り下げたことが描き出されている。商業社会がそれまでの社会と比べて、いかに優れた社会であるかという論点は、未だに現代的な問題であり、我々が暮らしている市場社会の問題を考えず

に読むことができない。商業社会は富裕であり、より自由であり、階級は存在するが、階級区分は緩やかであり、労働者も女性もそれまでの社会におけるよりも人間的に取り扱われる社会であり、奢侈的生活がモラルを害う危険性もあるが、この点は意見が分かるといった点に著者は注意を促す。信用、公債も有益であるとともに、過度に依存すると破産に直面し、国力を失って外敵に滅ぼされる可能性があるとしてヒュームなどは主張したが、焦点はどこまでにすれば有益かという限度問題であったことを明らかにしている。

本書は長年著者が追求してきた主題であること、40年以上に渡るエマソン、フィリップスン、スキナーとの交友に序文で触れている。本書が参照している原典はこの主題に関わるほとんどを網羅している。著者が学位論文で取り組んだ、ジェイムズ・ダンバーについての研究成果が、方々に織り込まれているのも興味を引く。本書はヒューム、スミスを中心としながら、ケイムズ、ミラー、ファーガスン、ロバートスンへの頻繁な言及、そしてハチスン、ウォレス、G.ステュアート、ジェイムズ・ステュアート、D.ステュアート、ダンバーなどへの少なからぬ言及をもっている。参照された二次文献も充実したものである。そして水田洋教授をはじめとする日本の研究にも例外的なほどの参照がある点も、特徴である。

本書は読みやすいものではない。物語というより分析であり、分析的議論の集積だからである。繰り返しも多い。フランス経済思想との比較も弱い。しかし、本書はスコットランド啓蒙が後世に伝えた最大の贈り物としての「商業社会」の概念についての広く深い考察を繰り返した最新の研究として、不滅の価値があると評価しなければならないだろう。

(田中秀夫：愛知学院大学)